

東西約110キロ。面積は道内一、全国4位の1427平方キロ。救急搬送の時間短縮が課題の北見市で、成果を上げたICTツールがある。傷病者搬送の判断に必要な情報を検索できるタブレット端末「救急医療情報Pad（パッド）」だ。北見地区消防組合消防署西出張所が昨年7月、介護福祉施設を対象に試験導入し、現場の滞在時間は平均9分13秒で、導入前の平均11分50秒から2分37秒短縮した。

Padは、北見市医療福祉情報連携協議会（事務局・北見医師会）の医療介護情報共有システム「北まるnet」を活用する。

救急要請を受けた救急隊員はまずPadに、傷病者の氏名か住所を入力。画面は瞬時に地図と一覧表に切り替わる。北まるnetに蓄積されている患者の既往症と現病歴、通院歴、服用薬などの情報をインターネット経由で取得でき、病状の予測や搬送先の判断に役立つ。

救急搬送迅速に

Pad導入前は、これらの情報の多くを現場到着後に聴取した。意識が薄れた傷病者からの聴取は難しい。傷病者に代わり家族や施設職員が、

北まるnet

患者情報共有し活用

必要資料を探すのに手間取るケースもある。

「Padを使えば現場到着前に必要な情報を入力できる

から、傷病者や家族、医療福祉施設職員と落ち着いた会話がで、情報共有がスムーズ」と話すのは同西出張所の菅森雅哉救急担当係長。今年1月中旬の出動時の現場滞在時間はわずか8分だった。菅森さんは「滞在時間の短縮が、次の出動への迅速な対応につながる」と、救命率向上への期待を語る。

同協議会は、北まるnet

を活用した「電子お薬手帳」の実用化にも取り組んでいる。

登録者増が課題

Padや電子お薬手帳の運用の鍵は、北まるnetへの登録情報が増えることだ。集積データはプライバシーに関わるため、同協議会は登録前に患者一人一人と承諾書を書わしている。今年5月末時点の登録患者数は681人。2013年の98件から7倍近い伸びだが、市の人口12万1408人（5月末）の中の0.56%だ。同西出張所がPadで検索した北まるnet登録者11人のうち、氏名以外の情

報を防ぐ狙いだ。昨年8月から市内東三輪の北見循環器クリニックとみわ調剤薬局で実証実験を行っている。



救急車内でPadの検索
情報を確認する救急隊員

北まるnet 個人の氏名や年齢、既往歴、利用する医療福祉機関、投薬履歴などをデータベースに登録し、関係者が接続することで情報共有するシステム。病院や薬局、介護施設、北見工大、北見地区消防組合などで構成する北見市医療福祉情報連携協議会が、北見医師会を事務局に運営管理している。

2012年度からシステム構築に取り組み、15年5月末時点の登録患者数は681人、接続事業所は68機関。救急搬送に必要な情報を検索できる医療情報Padや、処方薬を一元管理する電子お薬手帳の実験は、システムの二次活用として行っており、少子高齢化時代に対応した新しい広域医療として、道内外から注目されている。

報を取得できないなど、Padが役立たなかったケースが3件あった。電子お薬手帳も医療機関の情報提供あつてのシステムだ。田頭さんは「地域から信頼され安心を提供できる医療を、市内全域で確立したい。独り暮らしのお年寄りの登録にも力を入れたい」と話している。